

新・下野市風土記

古代のお菓子①



下野市教育委員会 文化財課

東の飛鳥プロジェクト事業として「幸せレシピコンテスト2022」を実施したところ、多くの皆さまに応募いただき、多種多様なレシピが集まりました。優秀作品やユニークな作品は、学校給食や市内の菓子店・レストランで提供されるかもしれません。どうぞお楽しみに！

現代の私たちは、「お菓子」という文字をみると、和洋を問わず砂糖などの甘味料をたっぷり使った甘いものを想像することと思います。そこで、今回から数回にわたって「お菓子」をテーマにお話ししていきましょう。今回は、甘いけれど大変だった砂糖の歴史。

日本に砂糖が来たのはいつから？

しもつけ風土記の丘資料館に見学に来た小学6年生に、「自分の家に砂糖がない人？」と質問してみると、「何でそんなことを聞くの？ 無いわけないじゃない」と言われます。

「じゃ、今から80年くらい前、日本中に砂糖がなかったことを知っている人？」と聞くと、「そんなの嘘だー」という反応が返ってきます。

「織田信長は、もしかすると金平糖を食べていたかもね？」と言うと、「それは知っている！」とのこと。テレビで見たことがあるのだそうです。

天文2（1543）年に種子島にポルトガル人が漂着した後、南蛮貿易が始まると、カステラ、金平糖などの南蛮菓子や砂糖などが貴重な輸入品となっていたようですから、金平糖を食べる織田信長、というのは、ありえない話ではありません。

砂糖の原料、サトウキビは、南太平洋のニューギニア周辺が原産地とされ、紀元前にインドネシアからインドに伝わり、インドで製糖技術が生まれた後、中東アジアや地中海沿岸、ヨーロッパに広がったと考えられています。

日本に初めて砂糖がもたらされたのは、飛鳥時代以降、遣隋使や遣唐使が持ち帰ったという説や、鑑真和上が伝えたという説があります。

天平勝宝8歳（756年）6月21日、平城京の東の大寺（現在の奈良県・東大寺）の正倉院に、光明皇后が亡き夫、聖武天皇の遺愛品を納めました。そのとき作成された収納品目録『東大寺献物帳』の5種の中に、『国家珍宝帳』と『種々薬帳』がありました。

『種々薬帳』には、正倉院に納められた約60種類の薬の名が記されており、その中に「蔗糖二斤一二両三分（約1.6kg）并椀」という記録があります。

蔗糖とは、砂糖のことです。当時、砂糖は、麝香や竜角、桂心、大黃などのさまざまな生薬と共に薬として用いられ、聖武天皇の遺愛品として正倉院に納められたのです。これらの薬はとても貴重で珍しく、貴族などの限られた階級の人しか用いることはできませんでした。

砂糖の原料であるサトウキビは、沖縄や奄美

諸島で今も見ることができます。江戸時代、この地域は琉球と呼ばれる国でしたが、薩摩藩の管轄下に置かれ、明（中国）にも朝貢し、重税に苦しめられました。

琉球から納められる粗糖（精製前の砂糖）は薩摩藩に莫大な収益をもたらし、輸入品として長崎の出島から大阪の間屋へ送られ、江戸や各地に出荷されました。

明治時代になると鎖国が解かれ、外国からも砂糖が輸入されるようになります。その後、明治23（1890）年の日清戦争後には台湾に近代製糖工場が建設され、日本の砂糖を供給するようになりました。

しかし、1930年代以降、次第に台湾や南方からの物資の輸送が制限されて砂糖の供給が止まり、国内の砂糖が不足したため、配給制となりました。終戦間際にはその配給も滞り、映画『火垂るの墓』で描かれていたように、飴玉などの甘いものは宝物のように貴重なものとなりました。

終戦後も国内では砂糖が不足し、昭和27（1952）年まで配給制が続けられました。

独立行政法人農畜産業振興機構企画調整部（担当：広報消費者課）ホームページから引用改変